



研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容

台湾屏東県の原住民集落に建立された神社(祠)の現状

金子 展也

(非文字資料研究センター研究協力者)

台湾は「台風の銀座通り」とも呼ばれるほど、台風の襲来が多く、毎年平均3～4個の大型台風襲来に襲われている。最近では、2009年の台風8号（モーラコット）の災害により、台湾に於いて死者が600人以上、行方不明者を含めると700人近くに達したと言われている。8月6日0時から8月9日19時までの積算雨量が、嘉義県阿里山で2,726mm、屏東県尾寮山で2,551mmに達した。これにより、台湾南部では、高雄県甲仙郷小林村の集落全体が深層崩壊による土石流で壊滅するなど過去50年間で最悪とも言われる災害となり、台風が上陸した8月8日にちなんで「八八水災」と呼称されている。

日本統治時代にも、大型台風は、数多く発生しており、特に山間地に住む原住民（昭和10年からは高砂族と呼ばれた）は、暴風雨により集落が破壊され、幾度ともなく集落ごと転々と移動せざるを得なかった。

今回、台風襲来の影響はあったが、これまでほとんど調査が行われなかった屏東県（日本統治時代の行政区分で高雄州潮州郡および恆春郡）の原住民集落に建立された下記神社（社祠）の現状調査を行った。



図1 今回の訪問箇所

2012/9/15:

ブタイ祠 (屏東県霧台郷霧台村)

サンティモン祠 (屏東県三地門郷三地村)

マカザヤザヤ祠 (屏東県瑪家郷瑪家村)

2012/9/16:

リキリキ祠 (屏東県春日郷力里村)

スポン祠 (屏東県春日郷士文村)

2012/9/17:

クスクス祠 (屏東県牡丹郷高士村)

1) ブタイ祠 (屏東県霧台郷霧台村)

鎮座日：昭和8年12月4日、祭神：天照皇大神

霧台郷は、屏東県東北部中央山脈に位置し、地勢は険しく平均海拔は1,000m以上の山岳地帯となっている。人口は3,000人余りと言われ、他の屏東県の原住民とは異なり、原住民の約98%がルカイ族⁽¹⁾である。屏東市から三地門に入り、達来村にある「山友服务站」で入山許可を得る。ここから曲がりくねった崖沿いの山道を1時間程度進む。途中、「八八水災」で寸断された道路の大規模修復工事が3箇所まで今なお行われていた。

途中で神社情報を収集しつつ、伊拉そして神山という集落に辿り着く。運良く、「神山愛玉」という愛玉ゼリー⁽²⁾の店でルカイ族の古老から、「霧台国小（小学校）そばの教会の下」との情報を得る。

「理蕃の友（台湾総督府警察局長蕃課編集 昭和7年～18年）」に掲載されている内容では、ルカイ族男女の裸身像が神社のそばに飾られていたとのことであり、この像は丁度現在の霧台国小の入口辺りにあったとの聞き取り情報を得た。従って、神社の位置は、小学校そばの魯凱文物館の上辺りで、霧台基督長老教会を含んだ一帯であると確認できた。

(1) 台東県、屏東県、高雄県に約12,000人が分布している。パイワン族と類似した貴族制度を有し、会所制度を有す父系社会である。

(2) クワ科イチジク属のつる性植物。その果実から作られるゼリーのデザートオーグョーチ（台湾語）という。実を水の中で揉みだすと固まる性質を発見した人が愛娘「愛玉」にちなんでつけたものとされている。



写真1 霧台國小。この左側が魯凱文物館である



写真2 霧台基督長老教会

2) サンティモン祠（屏東県三地門郷三地村）

鎮座日：昭和8年、祭神：天照皇大神

三地門はパイワン族語⁽³⁾で「スティムル」と称されていたが、清朝時代の福建からの入植者により、同音の「山猪毛」或いは「山地門」と称されるようになった。これは、当時の本島人が原住民を山猪になぞらえ、彼らが出草（首狩り）してくる所の意味であったという。昭和10年、日本政府は、パイワン族のティムル社、タバサン社、サラウ社の3社を現在の三地門地区に移住させ、碁盤状の集落を建設した。サンティモンは、タバサン社より分離して、1社を形成し、昭和11年に現在の地に移った。当時は高雄州屏東郡の管轄であり、「山地門」或いはカタカナで「サンテイモン」と称されていた。戦後は高雄県三地盟郷とされ、1947年に「三地郷」と改称、1950年に屏東県に帰属した。1992年8月に「三地門郷」と改称されて現在に至っている。

当時のサンティモン社は、屏東市から最も近い集落であった。昭和4年には自動車道路も出来、比較的理蕃政策の行き届いた所と言われた。昭和15年の皇紀2600年記念イベントとして^{かしはら}檀原神宮よりの御神火が台湾の主だった神社に献納された。サンティモン神社（祠）は、原住民集落の中で、唯一、御神火が阿緱神社より分火され、高砂族の青年ランナーによるリレーで運ばれた所でもあった。

昭和8年、献穀畑が、このサンティモン社に決定し、献穀が終わった記念としてその敷地にサンティモン神社（祠）が建立された経緯がある。この様な例は他の地域でも見られる。神社は丁度、三地門郷公所の対面にある中山公園の場所に建立された。

(3) 2003年の調査では、パイワン族は70,331人で台湾原住民で3番目に人口の多い民族である。主に台湾中央山脈の南脈、北は武洛溪上流の大母山から南の恒春半島（東南の山肌部と海岸地区）まで分布している。



写真3 中山公園入り口

3) マカザヤザヤ祠（屏東県瑪家郷瑪家村）

鎮座日：昭和10年頃？ 祭神：不明

マカザヤザヤとは、パイワン族語で「傾斜地の上方」の意味である。大正9年に地方制度改正により、高雄州屏東郡（後に潮州郡）に帰属することになった。

マカザヤザヤ社（瑪家）も「八八水災」の被害に遭った村であった。現在、マカザヤザヤ社は旧集落から完全に避難し、恒久住宅に新しい新天地を求めて住んでいる。現在、新たに命名された裡納里集落には、「八八水災」で居住地を離れざるを得なくなった霧台郷好茶村、三地門郷大社村および瑪家郷瑪家村の3村が区画を分けて暮らしている。この新居住地の中の瑪家村に瑪卡札亜（マカザヤザヤ）街があり、マカザヤザヤ社の頭目である徐春美（頭目世襲名：オロン）さん、78歳が住んでいる



ことがわかった。

オロンさんのご厚意によりマカザヤザヤ神社（祠）跡地に同行して頂いた。屏 35 線を進むと旧筏湾集落⁽⁴⁾、桃園園、もう一つの道に分かれる分岐点に達する。神社の石段は、この分岐点から旧筏湾集落に向う道に約 15 メートル程度進んだ地点から山際に向って造られた。そして、桃園園に入る道路を僅かに越えて左折し、下記写真 5 の突きあたりから多少右折した左側に檜造りの本殿があった。

(4) 日本統治時代、それまで山間部に分散していた原住民の集落化が推進され、その結果「マカザヤザヤ」、「マシリタ」、「若葉」、「カサギザン」、「下パイワン」の 5 村落が形成され、警察駐在所が地方行政事務を受け持った。「下パイワン」とは、筏湾集落を指す。



写真 4 右側の道路突き当たりから緩やかな右折となる



写真 5 神社は写真中央の上辺りにあった



写真 6 マカザヤザヤ社の頭目オロンさん（左）と筆者（右）

4) クスクス祠（屏東県牡丹郷高士村）

鎮座日：昭和 14 年 12 月 16 日、祭神：天照皇大神

車城郷の車城から 199 号線に入る。この道は、明治 7 年に明治政府が行った台湾（パイワン族牡丹社）への軍事出兵が辿った道の 1 つでもある。この事件は、牡丹事件と呼ばれ、明治 4 年、この地に漂着した琉球漁民が原住民により殺害され、台湾出兵へと繋がった。この事件以降、清朝は恒春半島及び台湾後山地区の統治に力を注ぐ結果を生んだ。

途中、台湾四大名湯の 1 つである四重溪温泉を越え、牡丹水庫から 172 号線に入り、11km 進むと、牡丹郷の南東端に位置するクスクス（高士）社に到着する。現在

のこの集落は、昭和 20 年の大型台風により、旧集落が破壊されたため、居住地を 6 度移り変え、最終的に辿り着いた場所でもある。

クスクス神社（祠）は、高雄州恆春郡蕃地のクスクス社に集落の守護神として、遠く遙かに太平洋を見渡し、またクスクス公学校・集落そして派出所を見渡す高台に建立された。現在、神社の遺跡としては、基壇の外、石段の一部と鳥居の亀腹のみが残っており、風化から基壇を防ぐために、屋根を設けて保存されている。この集落で陳清福（パラル・ロンシン）さん、85 歳にお会いした。ロンシンさん曰く、「この公学校を卒業した生徒は、神様のお陰で出世している。従って、何とか神社の修復をしたい」とのことであった。



写真 7 基壇保存状態



写真 8 亀腹

5) リキリキ祠（屏東県春日郷力里村）

鎮座日：不明、祭神：不明

力里國小（小学校）から 132 号線でリキリキ社に到着する。そのゲートの手前の山道を 20 分ほど車で上りつめると、標高 660 メートルの 12km の地点にパイワン族の大きな木彫り像が待ち受けている。その横に「老力

里部落遺址入口意象導覽図」と表記された木製の案内板が立っている。導覽図中には「日治時期古道」「小部落」「大部落」「駐在所」「神社」「公学校文化広場」「頭骨架遺址」等の文字が見られる。

案内は力里社集落会長・村長・狩猟会長およびもう1人のパイワン族の方々で、入山することになった。まず、山の神様に入山の許可を得るために、お祈りから始める。小型のトラックに乗り換えて更に山中に進む。途中から徒歩となり、20分ほど山中に入り込み、旧リキキ集落方面に辿り着く。

廻りの草木を取り除いて、基座を確認する。同行してくれた原住民の一人が、基座から数メートル離れた場所に大きな石の塊を発見し、声を出す。倒壊された石の一部にさかさまになった「碑」の文字が判読できた。総勢7人で傾いていた石を取り除くと、更に石板に文字が見えた。最終的に、「殉難碑」であり、大正3年10月9日に起きた抗日リキキ事件により亡くなった巡査および家族の名前であることが判明した。



写真9 基壇



写真10、11 殉難碑

6) スポン祠 (屏東県春日郷土文村)

鎮座日：昭和15年5月15日、祭神：天照皇大神

大正9年の台湾地方改制の際、高雄州潮州郡の蕃地として10余の集落が形成された。昭和16年、台湾総督府は「スポン社」を現在の春日村西部へ移住させ、新集落に社名の「Kasuvongan」と音の近い和風地名「春日社」

と命名した。戦後は春日村を郷名として「春日郷」が設けられ高雄県の管轄とされ、1950年に屏東県に帰属するようになり現在に至っている。

屏146号を13km登りつめると、土文社のゲートに出会い、ここからがスポン社となる。古華国民小学土文分校⁵⁾で神社の情報を収集。昭和2年生まれの程中元^{ツエンツォンユエン}(日本名：中元一郎)さんにお会いし、土文路39の裏山に神社が建立されたことが判明した。神社が建立された場所は平地になっているとのことで、早速草木の茂る山中に入り込んだ。終戦後、日本人の手により、神社は取り壊されたが基壇のみは残っていたという。残念ながら、その基壇も1988年にブルドーザーにより整地され、神苑も今や山中の一部になっていた。

程さんによると、拝殿はないが、本殿と3基の鳥居からなる神社であったとのこと。そして、祭神は天照皇大神であった。

(5) 明治39年、率芒菜典公学校として設立。大正11年、率芒公学校に、そして昭和16年、須本国民学校と改称している。校庭に立派な「台湾二葉松」が2本ある。これは、日本人教師の大橋先生、小原先生、並びにパイワン族教師李清吉先生が当時の程中元(5年生)に植樹をさせたものであると案内板に書かれている。



写真12 手前の山中に神社が建立された



写真13 神社の位置を教えて頂いた程中元さん(中央)